

古代莊園絵図読解の試み 「額田寺伽藍並条里図」

黒田日出男

Reading the Ancient Shoen Map

はじめに

- ① 絵図読解の方法
- ② 分析・読解のための研究史的前提
- ③ 色彩と線・面・文字そして絵画表現
- ④ 仰ぎ見る伽藍と寺院構造
- ⑤ 額田寺門前の堤と開発
- ⑥ 〈冠木門〉と寺領領有の論理
- ⑦ 額田部氏の本拠地と描かれた道
おわりに

【論文要旨】

「額田寺伽藍並条里図」を、先学の成果に学びながら「読解的方法」によって読み直し、その結果を記述すること、これが本稿の課題である。

最初に、全体的分析・読解がなされる。絵図全体の記号表現を線的記号・面的記号・絵画的表現・文字記載の四種類に記号分類したうえで、本絵図の特色である色彩に着目しての分析・読解を試み、四色の対立によって表現された記号世界として把握できるとする。そして次に、条里界線と絵画表現と文字記載を、さまざまな角度から相互に関連・関係づけつつ分析し、その多岐にわたる読解結果を記述している。以下は、部分・細部に着目しての分析・読解であり、まず額田寺伽藍を仰視する視線に着目することにより、その作成主体を推定した上で、寺院構造を六区画として把握し、それぞれの区画の分析を試みた。その結果、この絵図には八世紀後半の額田寺の構造と建物配置がかなりリアルに描かれていることが分かる。次に、その額田寺門前の分析・読解を試み、「土堤」と新堤、「楊原」、

「荒木田」、「川原田」などの諸表現によって、佐保川の自然堤防には一定の人工的補強がなされており、自然堤防後背湿地の開発が額田部氏と額田寺によって主導的になされている様相をうかがうことができる。また、額田寺の寺院地に描かれた諸門とは別に、十条二里廿六坪と同卅五坪の坪界線上に描かれている〈冠木門〉風の記号表現に注目し、それが額田寺領域の入り口の門であると解釈した。そこで額田寺の〈ウチ〉と〈ソト〉とが明瞭に区切られているのであり、後者に位置している「楊原」などはとくに「額寺」と記され、寺領であることがとりわけ強調されているのである。そして、「寺岡」の領有を根拠づける表現は、その周囲に描かれた「墓」であり、額田部氏の墓山領有を前提として、その「寺岡」化がはかられたのであるとの解釈などを示した。

以上のように、本稿は「額田寺伽藍並条里図」の全体と部分にわたる綿密な読解的記述としてあり、どの部分的指摘も全体的把握によって支えられており、また逆でもある。